

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	The mental health of young return migrants with ancestral roots in their destination country: A cross sectional study focusing on the ethnic identities of Japanese Brazilian high school students living in Japan
別タイトル	移住先にルーツを持つ若年帰遷移民のメンタルヘルス日本に住む日系ブラジル人高校生における民族アイデンティティに焦点を当てた検討
作成者(著者)	福井, 英理子
公開者	東邦大学
発行日	2024.03.13
掲載情報	東邦大学大学院医学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨.
資料種別	学位論文
内容記述	主査: 桂川修一 / タイトル: The mental health of young return migrants with ancestral roots in their destination country: A cross sectional study focusing on the ethnic identities of Japanese Brazilian high school students living in Japan / 著者: Eriko Fukui, Takashi Uchino, Masunari Onozaka, Takashi Kawashimo, Momoko Iwai, Youji Takubo, Akiko Maruyama, Sachio Miura, Ryo Sekizaki, Masafumi Mizuno, Naoyuki Katagiri, Naohisa Tsujino, Takahiro Nemoto / 掲載誌: Journal of Personalized Medicine / 巻号・発行年等: 12(11): 1858, 2022
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第1084号
学位記番号	甲第749号
学位授与年月日	2024.03.13
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD87988223

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

福井英理子より学位申請のため提出した論文の要旨

学位番号甲第 749 号

学位申請者 : 福 井 英 理 子

学位論文 : The mental health of young return migrants with ancestral roots in their destination country: A cross-sectional study focusing on the ethnic identities of Japanese-Brazilian high school students living in Japan

(移住先にルーツを持つ若年帰遷移民のメンタルヘルス — 日本に住む日系ブラジル人高校生における民族アイデンティティに焦点を当てた検討)

著 者 : Eriko Fukui, Takashi Uchino, Masunari Onozaka, Takashi Kawashimo, Momoko Iwai, Youji Takubo, Akiko Maruyama, Sachio Miura, Ryo Sekizaki, Masafumi Mizuno, Naoyuki Katagiri, Naohisa Tsujino, Takahiro Nemoto

公表誌 : Journal of Personalized Medicine 12(11): 1858, 2022
DOI: 10.3390/jpm12111858

論文内容の要旨 :

背景・目的: 世界で2億7200万人いると推測される国際移民は年々増加傾向を認め、文化や経済、政治におけるグローバル化が加速している。近年ではアジアにおいても国際移民が増加傾向にあり、日本の2022年時点の在留外国人数は276万人(総人口の2.2%)である。一方で、母国を離れて移住することは様々なストレスを生じやすく、ストレス関連障害のみならず精神病的障害など様々な精神疾患の発症のリスク因子であることが明らかになってきた。中でも移住先の国にルーツを持つ return migrants においては、祖先の母国の文化との接触がアイデンティティに影響を与え、メンタルヘルスの問題を抱える可能性がある。若年者は精神疾患の好発年齢であり、精神疾患の予防や予後の改善のために早期介入をすべき最も重要なターゲットであるが、日本では若年の移民の援助希求が適切になされていない課題がある。若年の移民のメンタルヘルスの特徴や、彼らの援助希求行動の傾向について量的に評価をした研究もほとんどなく、更なる実態調査が望まれる。日本に住む代表的な移民である日

系ブラジル人は、移住先の国にルーツを持つ特殊な return migrants である。彼らは通常の国際移民よりも、文化の面だけでなく人種の面においても複雑であり、有する民族アイデンティティやメンタルヘルスに与える影響もより一層複雑であることが推測される。私たちは彼らのメンタルヘルスの特徴を、民族アイデンティティの視点から明らかにした。

対象・方法：この研究は、日系ブラジル人高校生 25 名および同地域に住む日本人高校生 62 名を対象に質問紙による調査を行った観察研究である。対象者に精神的健康度、援助希求行動、民族アイデンティティに関するアンケート調査を行い、両群を比較検討した。

結果：日系ブラジル人群は日本人群と比較して有意に精神的健康度が低く ($p < 0.001$)、また家族など身近な関係のものにより援助希求をしにくいことがわかった ($p = 0.004$)。さらに、日系ブラジル人群の中でも民族アイデンティティの低い群は精神的健康度が有意に低かった ($p = 0.040$)。援助希求行動において、下位分類である私的な関係の相手に対する援助希求の程度は日系ブラジル人群で有意に低かった ($p = 0.000$)。

考察：母国を離れて移住をすることはストレスを生じやすいことが繰り返し報告されているが、本研究の対象者である移住先の国にルーツを持つ return migrants においても同様の結果であった。このことから、国際移住をするということ自体が、移住した世代のみならずその子孫にとっても大きなストレスを与えることが考えられた。援助希求の傾向について、日系ブラジル人は同じ地域に集まって住んでいることが多く、閉鎖的なコミュニティを形成していることが多い。そのため、私的な情報が拡散しやすい身近な人には援助希求しにくいことも考えられた。一方で公的な関係の人に対する援助希求の傾向については、日本人と比較して有意な差が認められなかった。このことから、日本人の若年者に対する早期介入の方略と同じように、メンタルヘルスリテラシーの向上を目指した普及啓発や教育を実施することと、若年者が援助希求しやすい窓口を設置することが有効となるかもしれない。民族アイデンティティについては、日系ブラジル人高校生が日本人高校生より有意に低く、民族アイデンティティの葛藤を抱えていることが示唆された。さらに、民族アイデンティティの低いものは高いもの比べて精神的健康度が低く、先行研究と同様に、民族アイデンティティはメンタルヘルスに影響を与えていることが考えられる。彼らのメンタルヘルスの不調の予防のためには、ストレスに対する防御となる民族アイデンティティの形成をサポートすることが効果的であろう。特に、思春期は民族アイデンティティを含む自我同一性が確立する年代であり、この確立へのサポートはより効果的かもしれない。本人が自身のアイデンティティについて考え学ぶ時間と機会を十分に設け、その形成に寄り添うことが望ましい。

結論：本研究は、これまでほとんど明らかになっていない日本に住む日系ブラジル人のメンタルヘルスの実態の一部を明らかにした。移民が共生できる社会の構築に向けた第一歩となることが期待される。

1. 学位審査の要旨および担当者

学位番号甲第 749 号	氏 名	福 井 英 理 子
学位審査担当者	主 査	桂 川 修 一
	副 査	西 脇 祐 司
	副 査	端 詰 勝 敬
	副 査	村 上 義 孝
	副 査	長 谷 川 友 紀

学位論文の審査結果の要旨：

近年国際移民は増加傾向にあるが、移住は民族アイデンティティの葛藤を生じてストレス関連障害や精神病性障害といった様々な精神疾患発症の危険因子であることが知られている。また、その子孫に世代を超えた困難を起こす可能性があることも指摘されているが、世界中で移民は適切なメンタルヘルスサービスの利用が少ないといわれている。帰還移民のうち日本に先祖のルーツを持つものは日系人と呼ばれ、日系ブラジル人が最も多いが、通常国際移民よりも文化と人種の両面で複雑となっている。そこで若年の日系ブラジル移民を同年代の日本人と比較検討することで、そのメンタルヘルスの特徴を民族アイデンティティの視点から明らかにすることを目的とした。地方都市にある 1 校に通う日系ブラジル人高校生と同地域にある私立高校 1 校に通う日本人高校生を対象として精神的健康度、援助希求行動、民族アイデンティティに関するアンケート調査を行い、両群を比較検討した。用いた質問紙は WHO-Five Well-being Index (WHO-5J)、Kessler 6 Scale (K6)、General Help Seeking Questionnaire (GHSQ)、Multigroup Ethnic Identity Measure (MEIM) で、得られた結果を統計解析した。日本人高校生 62 名 (J 群)、日系ブラジル人高校生 25 名 (JB 群) による属性では両群の間に男女比、年齢、経済的な有意差はないが、帰属意識では有意差が認められた。質問紙の結果では JB 群の WHO-5J スコアは J 群より有意に低く、K6 スコアは有意に高かった。JB 群の GHSQ トータルスコアは J 群より有意に低かった。インフォーマル・リソースに関する GHSQ サブスケールの平均は、JB 群が J 群より有意に低かったが、フォーマル・リソースに関する GHSQ サブスケールでは有意差は認められなかった。MEIM スケールの平均は JB 群が J 群より有意に低かった。JB 群を MEIM トータルスコア合計点が 7 点以上を高民族アイデンティティ (HE) 群、6 点以下を低民族アイデンティティ (LE) 群に区分し、WHO-5J と K6 の平均で比較した。WHO-5J では HE 群と LE 群で有意差を認めたが、K6 では有意差は見られなかった。JB 群が J 群より精神的健康度が低いのは、他の帰還移民の調査と同じく日系ブラジル人高校生は自分の意思によらない移住のため、メンタルヘルスの問題を経験するリスクが高く、早い段階での適切なケアや支援を受ける可能性が低いことが示唆された。援助希求行動で家族や友人などインフォーマル・リソースを求める傾向が低い理由は、個人情報を広める可能性から助けを求めることが困難であると考えられた。民族アイデンティティでは、JB 群のうちでも特に LE 群は WHO-5J スコアが低いことから、その葛藤を有していることが示唆された。帰還移民のなかでも特に若年帰還移民は自我同一性が確立する年代であることから、民族アイデンティティ形成のサポートが重要と考えられた。

学位審査会は、2023 年 7 月 25 日に西脇、端詰、長谷川、桂川が参加して行われた。村上は書面審査として評価を行った。まず申請者より約 20 分間の研究報告があった後に質疑応答がなされた。そこでは、JB 群対象者が少数であることの統計学的限界について、2 群の背景要因による群間差の影響を除外する方法、日系移民を調査する目的、ポルトガル語を使用した質問票の妥当性、民族アイデンティティの詳細調査、調査の希少性、男女比の違いの検討、他国の帰還移民との違い、民族アイデンティティ確立の必要性について、帰還移民における 2 つの文化間摩擦と葛藤について、日系ブラジル人高校生のメンタルヘルスを向上させるポイントは何か、など活発な質疑がなされ、申請者はそれらの質問に適切に回答した。

本研究は、若年の移民のメンタルヘルスの特徴や、彼らの援助希求行動の傾向について量的に評価をした貴重な調査研究であり、審査委員全員一致のもとで、学位に値するものと判断された。